

隨泉寺寺報

平成 20 年 (2008 年) 12 月号 第 460 号

TEL 082-892-0217 <http://www.zuisenji.com/>

浄土真宗本願寺派 高峯山隨泉寺

報恩講法要

講師 善教寺副住職 廣幡 康祐師

講題 『しあわせになる方法』

『12 月 食いたい 飲みたい 着たいで
きのうも月日におくられ きょうも月日におくられて』

浅原才市

私たちの日暮しは、「食いたい、飲みたい、着たい、で」と昨日も今日も欲望に流され、月日をむなしく過ごしてしています。そんな私たちの一生をむなしく終わらせないと願いかけてくださっているのが如来さまです。「本願力にあひればむなしくすぐるひとぞなき」(高僧和讃)

今年も残すところあと一月です。飲んで、食って、着て、一年が済んでしまいます。今年一年何をしたのだろうか。何をしたのか解らない一年ならば無くても同じです。

今年は何をした、このことに遇ったと確かにいえる何かに遇っていますか。

時々ものをとりに部屋に入って、何をとりにきたのか解らないことがあります。何を探しにきたのか解らずに死んでしまっただけは、むなしく過ぎたといわねばなりません。

12 月の法座予定

- 12 月 7 日 …… 掃除 中須賀
- 12 月 14 日 昼席午後 1 時より …… 報恩講法要
- 12 月 14 日 夜席午後 7 時より …… 出張法座 中須賀 宍戸司氏宅
- 12 月 15 日 朝席午前 10 時より …… 報恩講法要 おとき
- 12 月 15 日 昼席午後 1 時より …… 報恩講法要
- 12 月 31 日 午後 11 時より …… 除夜会・元旦会
- 1 月 5 日 午後 6 時より …… 門信徒会本部役員会

☆報恩講 12 月 14 日 (日) ~ 15 日 (月)

門徒宗 娘も光る 程みがき

<狐雲>

報恩講の季節です。江戸時代の川柳は、当時のお講を皮肉っています。お講は交際の場でもあり、見合いに利用されました。娘は、寺参りというのに、光る程みがき飾って出ました。中には去年のお講での見合いが成功せず、二度目の見合兼用参詣という、手合いもある次第です。



正午までの食事を齋(とき)といい、午後の食事を、非時(ひじ)と申します。お講に齋や非時が出るようになったのは、蓮如上人からです。本願寺では、報恩講中、毎日午前の日中法要がすむと、お齋があり、午後の速夜法要がすむと、非時がでます。秀吉が諸侯に号令した鴻の間で、門主出座の上、ともどもに膳につきます。齋は、仏制定の法食(ほうじき)であり、善根を増長す、とあります。

☆除夜会・元旦会法要

12 月 31 日 午後 11 時より 例年の如く 除夜会のお勤めを致します。

誘い合わせてお参り下さい。

今年は前住職がお浄土に還り、淋しい暮れです。去年の暮れは病院に入院していました。毎年元旦会で今年の抱負 座右の聖語を申しておりましたが、今年からは聞けないので残念です。去年は病院からファックスで送ってきました。<今年の聖語を「聞思莫遲慮」と致しました。親鸞聖人の主署「教行信証」の総序のご文です。「撰取不捨の真言 超世希有の正法 聞思して遲慮すること莫れ」>『お念仏はあなたを必ず救い取って捨てない、この世でまれな尊い正しい法、聞きえて教えに遇ったなら、躊躇することなくその法にまかせよ』ということです。

お念仏の教えはお釈迦様が説いてくださった八万四千といわれる多くの教えの中のひとつの法です。どの教えも尊い教えですが、全ての人々が救われるというものではありません。厳しい修行を成し遂げられる人、難しい学問を理解できる人、静かに座禅を組み煩悩を離れる事ができる人、等々の優れた人のみが到達できる境地では、到底私が救われることにはなりません。

お念仏のみ教えは、全ての生きとし生けるものが何一つ条件をつけないで、すくわれて仏にならせていただく教えです。だから【撰取不捨の真言 超世希有の正法】なのです。前住職はそのお念仏の法に遇ったのだから【遲慮すること莫れ】と勧めているのです。どうぞ前住職の遺言と思って心に留めてください。ちなみに前住職の《院号》《聞思院》はこの言葉を出拠としています。前住職を偲んで 沢山お参り下さい。

このままの私が
仏さまの本願の
お目あてであった



気がつかせてもらってみますと、川の流れにより添って、岸が、最後の最後まではたらき続けて、流れを海に届けているように、貧しく、愚かで、不器用な私により添って、「兎と亀」の話を思い出させ、「亀は、亀のままでいいのだよ、兎になろうとしなくてもいいのだよ」と、気づかせてくださったり、不出来な教員にも、不出来な教員の生きがいを目覚めさせてくださるおはたらきが、はたらきづめに、はたらいてくださった気がするのです。

私が、校長を勤めさせていただいているときでした。養護の先生が、「校長先生、きょうは、虫歯予防デーです。朝会で、子どもたちに、虫歯予防の話をしてやってください」と申します。

「歯のない者に、歯の話をさせるなんて残酷ですよ。赦してください」というのですが、「でも、それでは虫歯予防デーがつとまりません」と、承知してもらえません。仕方がありません。覚悟を決めて、朝礼台に上がりました。

「おはようございます」と、子どもたちと挨拶を交すと、「きょうは、虫歯予防デーだそうです。でも、校長先生の歯は、全部虫がたべてしまって、一本もありません。いまあるのは、みんなにせもので、ほんとうの歯ではありません」といって、上の入れ歯も下の入れ歯も外してしまい、歯のない口で、「こういうことになってはダメです。こういうことにならないためには、どうすればいいか、それは、教室に帰ってから、受け持ちの先生から、よくよくお聞きなさい」といって、朝礼台を降りました。

先生方も、子どもたちみんなも、みんな、涙をぐいながら、笑いころげてくれました。そして、その後、虫歯予防デーを迎える度に、先生方や子どもたちから、「忘れることのできない虫歯予防デーがやってきました。校長先生のようにならないように、きっと、歯を大切にします」というような、便りをもらうことになりました。

法如上人の「鶴の脚の長きをも、鴨の脚の短きをも、鷺の羽の白きをも、鳥の羽の黒きをも、黒きを漂すにあらず、白きを染むるにあらず、短きを継ぐにあらず、長きを切るにあらず、長きは長きなり、短きは短きなり、白きは白きなり、黒きは黒きなり」このままの私が、本願のお目あてであったということ、いま、しみじみと、ありがたく仰がせていただく私です。

ぼくが光と音を失ったとき
そこにはことばがなかった
そして世界がなかった

ぼくは闇と静寂の中でただ一人
ことばをなくして座っていた

ぼくの指にきみの指が触れたとき
そこにことばが生まれた
ことばは光を放ちメロディーを呼び戻した

ぼくが指先を してきみとコミュニケーションするとき
そこに新たな宇宙が生まれ
ぼくは再び世界を発見した

コミュニケーションはぼくの命
ぼくの命はいつもことばとともにある
指先の宇宙で紡ぎ出されたことばとともに

「光」が認識につながり、「音」が感情につながるとすれば、「言葉」は魂と結びつく働きをするのだと思う。私が幽閉された「暗黒の真空」から私を解放してくれたものが「言葉」であり、私の魂に命を吹き込んでくれたものも「言葉」だった。

私は今、「言葉」によって組み立てられたさまざまな概念と、多様で複雑な現実の諸事象との相互作用のなかに生まれる、新たな思想と知の世界をくみ上げていく仕事に就いている。おそらく、これは何者かが意図した一つの流れに沿う生き方なのだと思う。

《福島 智（ふくしま さとし）東京大学先端科学技術研究センター助教授
1962年、兵庫県生まれ。9歳で失明し、18歳で失聴、全盲ろうとなる。》

福島先生は眼も見えませんし、耳も聞こえません。指で打つ点字で会話をします。話は18歳まで聞こえていたので出来ます。福島先生は大事なものは<言葉>と言われます。すべてのものは言葉で表すことによって存在します。

<お念仏>は仏様の真実を表す言葉です。南無阿弥陀仏は言葉によって真如法性を現します。

